

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

## ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

### 第四章 フィッシャー夫人

フィッシャー夫人はエーガー川のほとりにロウソク工場を持っていて、年に一度は仕事を休んでドルシャウゼンで「療養」をするという結構なご身分だった。「療養」には黒い防水シートでしっかり覆ったドレス用のバスケットとハンドバッグを持っていく。ハンドバッグの中には、ハンカチ、オーデコロン、爪楊枝、お腹を巻くのに具合のいい毛糸のマフラー、そして夫人の腕前を示すロウソクのサンプルが何本か詰め込まれていた。これは休暇が終わって家に帰るときに、感謝のしるしとして宿に置いてくるものだった。

ある七月の午後四時のこと、フィッシャー夫人がペンション・ミュラーに姿を現した。赤いほひげを生やしたポーターを従えて小道をせかせかとやってきた。わたしは東屋の中からその様子を眺めていた。ポーターはバスケットを抱え、口にひまわりの花をくわえている。ペンションの奥さんと五人の無邪気な娘さんたちが、階段の上にきちんと並んで、よくいらっしやいましたと出迎えた。

「まったくひどい旅だったわ」フィッシャー夫人が言った。「列車の中ではなんにも食べられなかったの。まともな物が一つもないんですもの。もうお腹がぺこぺこ。でも、お夕食前にたくさんいただくわけにもいかないから。そうねえ、お部屋にコーヒードも運んでもらおうかしら。あら、ベルタじゃないの」フィッシャー夫人は末娘のベルタに目をやった。「まあ、間違えちゃったわ！ 胸もこんなにふつくらして！ ここまでくれば奥さんも一安心ね」

奥さんはもう一度フィッシャー夫人の手をとった。

「キャシーもすっかりきれいになって。でも、いくらか顔色がさえないかしら。さては、今年もまたニュールンベルグからあの人が来ているのね。奥さん、あなたは どうして娘さんたちをいつまでも家に引き止めておくの？ 毎年、今年こそ独りになっているだろうと思ってやってくるのに、ほんとにあきれた人ね」

奥さんはばつが悪そうに言い訳をした。

「主人が亡くなってからがあんまり幸せだったものですか」

「でも、結婚なんてものは 思い切りが肝心よ。黙って見守ってあげることね。娘さんたちが幸せな家庭を作るのを よかったと思うときが必ずやってきますよ。それはそうと、今も大勢さん泊まつていらっしやるの?」

「ええ、おかげさまで部屋は全部ふさがっております」

玄関ホールで細かい説明を終えると、一行は声を落として階段をのぼっていった。しかしそれもつかの間、部屋に入るとすぐに六重唱がはじまっていた。フィッシャー夫人は、窓が庭に面した大きな部屋を毎年借りていた。

その時わたしは東屋の中で『ルルドの奇跡』を読んでいた。神父さまがわたしになかばあきらめた顔で 心して読むようにとおっしゃった本だ。しかし、せつかくの奇跡も、フィッシャー夫人のおかげでどこかへすつとんでしまった。この騒がしくては、マリアさまの足元に咲く白バラでさえ、萎れてしまうのではないかと思われた。

…荒地で羊を追っていた少女はただの羊飼いであった…

二階の部屋から話し声が聞こえる。

「ええ、もちろん洗面台は重曹で磨いておきましたわ」

…貧しさにあえぐ少女の足には、申し訳程度にぼろきれがまきつけてあり…

「家具は全部庭に出して三日間乾燥させましたのよ。この敷物は古着を壊して作ったんです。去年の夏、奥様が私たちにフランネルの素晴らしいペチコートをごいただきましたでしょ、あれの切れ端も使わせていただいたんですよ」

…耳も聞こえず話してもできず、土地の人間は皆、この少女を白痴だと思い…

「ええ、それは皇帝の新しい肖像画ですわ。茨の冠をかぶったキリスト像は廊下に出しましたの、寝室にはあまりふさわしくないような気がしたものですから。奥様、コーヒーはお庭の方にご用意いたしましたでしょうか?」

「そうねえ、そうしてもらおうかしら。でも、なによりもまずコルセットをはずして靴を脱がなくちゃ。サンダルに履きかえるとほんとにほっとするわ。今年はとくにしっかりと『治療』して帰るつもりよ。もう神経がどうにかなくなってしまっそうなの! このところいらいらしっぱなしで。列車に乗っているときだってそうだったわ。だからずつと頭からハンカチをかぶってたのよ。車掌が切符を集めに来た時だって取らなかつたくらいですもの。あーくたびれた!」

それから少しして、フィッシャー夫人がキャシーを従えてわたしのいる東屋へやって

きた。夫人は黒と白の水玉の部屋着に、エナメル皮のひさしがついたキャラコの帽子をかぶっていた。キャシーはモルトコーヒーを入れた青い小さな水差しを持っている。わたしたちはとおりいっぺんの挨拶を交わした。夫人は腰を下ろすとハンカチを取り出してカップと受け皿を磨き、それがすむとポットのふたを取って、ぶつぶつ言いながら中を覗き込んだ。

「やっぱりモルトコーヒーだわ」夫人が言った。「はじめの二、三日はこれを我慢するのが大変なんですよ。そりゃあ家を離れたんですから、多少の不便やなれない食事をとにかく言うつもりはありませんわ。主人にもよく言いましたけど、わたしはきれいなシートと上等なコーヒーカップさえあればどんなところでも結構楽しくやれるほうなんです。でも、この頃のようにこつ神経が疲れていると、これを飲まないですむなら、どんな犠牲でも払おうって気になりますよ。ところで、あなたはどこがお悪いの？ とてもお元氣そつだけれど！」

わたしは笑いながら肩をすぼめた。

「イギリスの方つてどうしてそうなのかしら。あなたがたは身体のことを話すのがお嫌いなようね。列車の話はしてもエンジンのことには触れたくないっていうこと？ でもね、あなた、お腹の中身がわからなければ、他人を理解することなんかできませんよ。宅の主人が大病をしたときなんか 湿布が」

夫人はコーヒーの中に砂糖の塊を一つ落とし、それが解けるのをじっと見ていた。

「そういえば、わたしの知り合いに、兄弟のお葬式に出るためにイギリスへ行った人がおりましてね、なんでもその人の話だと、あちらではレストランに行くにも皆さんボデイスを着ていらつしやるんですつて？ スープを運んできた給仕が目やり場に困っていたそうですわ」

「そこにはドイツ人の給仕しかいなかったんじゃないありませんか」わたしが言った。「イギリス人だつたら頭のとっぺんを見るはずですよ」

「おや、そうおつしやるとところをみると」夫人が言った。「イギリスがドイツ人に依存しているつていうことはわかつておいでのようね。でなきゃあなたのお国に気の利いた給仕がいるはずありませんもの」

「あら、そんなに気が利いているんですしたら、頭のとっぺんを見てもらいたいものですわ」

「ほらね、あなただつてやつぱりボデイスのこと恥ずかしいと思っているのよ」

わたしは庭に目を移した。ニオイアラセイトウと立ち木作りのバラがドイツ風のブーケのように直立していた。給仕のことなんかどうでもよかった。その人は肉料理を運ぶためにご葬儀に出席なさつたのですか、と切り返してやろうかとも思つたけれど、ばかばかしくなつたのでやめておいた。暑くて意地悪を言つ元氣もなかつたし、六時半までフイッシャー夫人のいらいらに付き合うほど、わたしはお人よしではなかつた。

神様がわたしに救いの手を差し伸べてくださったのはちょうどその時だつた。ラット

氏がまるで天使のように、白い絹のスーツをまとって小道をこちらにやってきたのだ。ラット氏とフィッシャー夫人は古くからの知り合いらしかった。夫人はラット氏のために、部屋着のひだをたぐり寄せて緑色のベンチに場所を空けた。

「まあ、涼しそうなお召し物なこと」夫人が言った。「こんな言い方で何ですけどとても素敵なスーツですわー！」

「おや、去年ごろんになりませんでしたかな？ この生地は、わたしがはるばる中国から持ち込んだものでしてな。身体にぐるぐる巻きつけてロシアの税関を決死の覚悟でかくぐったんですよ。それも半端な量ではありませんぞ。なにせ義理の妹に二着分のドレス生地、わたしのスーツ三着分、それにミュンヘンの我が家、と申してもフラットではありませんが、そこで働いているメイドにもケープなんぞと思ひましてな。もう汗だくで、ぐるぐるまきを解いたはいいが、どれも一洗いしなければ使い物にならない始末で」

「あなたのように冒険をなさる方は見たことがあります。いつだったかしら、ほら、あなたがトルコで雇ったガイドが、酔っぱらって狂犬にかまれたあげく、崖から香油用のバラ園に落ちたという話、あれなんか本になさらくちやもったいないわ」

「時間が 時間があればそうしたいところですが。とはいっても色々と書きためてはいるんですよ。それはそうと、せっかくならうしてお目にかかったんですから、夕餉の後にほんの少しだけ静かに話の続きをしようじゃありませんか。男つてものは、淑女と一緒にすることで、無上の安らぎを覚えることが多々ありましてな」

「ええ、よくわかりますわ。ここにいたって気骨の折れることが多いですものね とくにあなたは引つ張りだですもの 人気がありだから。わたしの主人もそうでした。背がたかくてそれはハンサムだったんですよ。それでも夕方になると、よくキッチンにやってきましてね、『ねえおまえ、二分間だけばかなまねをさせておくれ』って申したものですわ。あの人の一番の慰めは、わたしに頭をなでてもらうことだったんです」

伴侶のいない寂しさを物語るように、ラット氏のはげ頭が日差しを受けて光っていた。夕食後の二人の静かなおしゃべりとはどんなものだろう。はげ頭のサムソンを相手に、いったいどんなデリラが演じられることやら。

「そういえば昨日、ホフマン君がベルリンからやってきましたよ」ラット氏が言った。「ああいう方とおしゃべりはごめんこうむりますわ。去年だったかしら、あの方がフランスに滞在していたときのお話を聞かせてもらったんですけどね、驚いたことにテールナフキンもないようなホテルに泊たって言っじゃありませんか。オーストリアでは馬車の御者だってテールナフキンくらいは使っつていうのに。それに、ベルタがお部屋のお掃除にいったときに、『自由恋愛』について議論を吹っかけたそうですよ。そういう人と親しくお付き合いしたいとは思いませんね。ええ、もともとそんな感じのする人でしたよ」

「まだまだ血の気が多いんでしょうな」ラット氏は鷹揚に答えた。「そういえば、わた

しもあの男とは何度か口論になったことがありましてね たしか、あなたもその場におられましたな？」そう言いながらラット氏がわたしの方を見た。

「何度もでしたわ」わたしはにこやかに答えた。

「どうやらあなたもこのわしを老いぼれ扱いしているようだ。別に隠し立てするつもりなんかありませんよ、わたしももう六九歳だ。とは申せ、このわしがほんのちよつと声を張り上げただけで、やっこさん縮み上がってなんにも言えなくなってしまうたのを、あなただつてご覧になったはずですよ？」

わたしはまったくその通りですと答えた。そして、フィッシャー夫人の視線を感じたので、手紙を口実にしてひとまず退散することにした。

部屋の中は暗くてひんやりしていた。栗の木がみどり色の枝を窓に押し付けている。馬巢織りのソファアが、この上に寝転ぶなんてはしたないわよ、と言っているような気がしたので、赤いクッションを引きずり下ろして床の上に横になった。ところが一息ついたとたん、ドアが開いてフィッシャー夫人が顔をのぞかせた。

「ラットさんはお風呂の予約があるそうなの」夫人はドアを閉めながら言った。

「お邪魔してもかまわない？ いいのよ、気にしないでそのまま置いてちょうだい。そんなふうになっているとまるでペルシヤ猫ね。ねえ、あなたのことを聞かせてください。さらい。わたしは初対面の方にお会いすると、スポンジのようになにかも吸収しないと気がすまない性質なの。まずはじめに 結婚してらっしゃるのかどうかがつてもいいかしら？」

わたしは結婚していることを認めた。

「それで、ご主人は今どこにいらっしゃるの？」

夫は船長で危険な航海の真最中です、とわたしは答えた。

「まあなんてお仕事かしら、あなたを まだこんなにお若いあなたをほつたらかして」

夫人はソファアに腰を下ろすと、わたしに向かっていたはずらっぽく指を振った。

「ここにいることはご主人に内緒なんですよ。だって、こんなに美しい髪をした奥さんを一人で外国に行かせる男なんかいるはずありませんもの。もし、列車の中でお財布をなくしてもしたらどうするつもり？ それも、北ロシアの雪原で、真夜中に立ち往生している列車の中だったら？」

「わたし、そんなところに行くつもりなんか」

「なにもあなたが本当に行くとは言ってませんよ。でも、ご主人を送り出すまでは、ここに来るつもりなどなかったんですよ。長いこと女をやっていればそのくらいのはわかりますよ。ご主人のいない寂しさをまぎらすために、こんなところまで来てしまったというわけね。家にいて、ご主人のいないベッドを見ることに耐えられなくなつたんですよ わかるわ。わたしだって、主人が亡くなってからというもの、安らかな気持ちになつたことなんかありませんもの」

「夫のいないベッドも悪くないと思いますけど」「わたしはクッションをつつきながら、眠たそうな声で言った。

「そんなはずありませんよ。妻だったら 寝てもさめても 夫のそばにいたいと思つのが自然でしょ。どうやら、あなた方はまだ強い夫婦の絆で結ばれてはいないようね。でも、そのうちきつと、一本の小さな手が強い絆を海の上に渡してくれますよ 港に帰ってきたご主人が、子供を抱いているあなたの姿を見るまでの辛抱だわ」

わたしは起き上がってきちんと座った。

「わたしは子供を生むことくらい恥ずべき行為はないと思つていますわ」

しばらくのあいだ沈黙が続いた。やがてフィッシャー夫人はかがみこんでわたしの手をとった。

「かわいそつに、こんなにひどい仕打ちをされたらだれだって」夫人は納得したように言った。「女にとつて、頼れる男がそばにいないことほど辛い事はありませんものねえ。結婚していたらなおさらのこと。だってそうでしょう。別の人が手を差し伸べてくれたって、たとえ不幸でも、未亡人にでもなっていない限り、その手にするわけにはいかないんですから。それに、船長さんともなると色々と誘惑も多いでしょうしね。海の男はテノール歌手のようにすぐにのぼせあがるから だからなおさら、あなたは明るく情熱的にふるまわなければならぬんだわ。ご主人が港に着いたときに、みんなに自慢できるような奥さんでいなければ」

フィッシャー夫人をごまかすためにでつち上げた夫の姿だったが、彼女のおかげでかなり現実味を帯びてきたので、もはや幻の船を待ちながら、海藻を髪に絡ませて岩の上に腰を下ろしている自分の姿を想像することができなくなっていました。かわりに、乳母車を押して船のタラップを上り、夫がなくなってきた制服のボタンを数えている自分の姿が目の前にちらつく始末だ。

「子供をどつさり生むことよ、今のあなたに必要なのはそれだけだわ」フィッシャー夫人がしみじみと言った。「子供を持てば、あなたをこんなふうにはほつたらかしにはできなくなるわ。ご主人の喜ぶ顔を想像してごらんなさいな」

そういわれたつて、危なっかしくておいそれとそんな計画に乗るわけにはいかない。誰の子ともわからない赤ん坊をどつさり抱えたわたしが、とつぜん夫の前に姿を現したとしても、月並みなイギリス男が感激するとはとても思えなかった。わたしは自分の処女懐胎を難破させ、夫をホーン峰のあたりまで追っ払うことに決めた。

そのとき夕食を知らせるベルが鳴った。

「後でわたしの部屋へいらっしやらない」夫人が言った。「あなたにはまだお聞きしたいことが山ほどあるのよ」

夫人はわたしの手を握り締めた。しかし、わたしがその手を握り返すことはなかった。